

実務家教育と DBJ 金融アカデミー

神藤 浩明

第 1 回目の本欄で、設備投資研究所が現在、研修・教育機能の一環として「DBJ 金融アカデミー」を担っていることをお伝えした。当行が民営化のスタートを切った 2008 年度から始まり、プログラムは「基本 I・II」「選択」「特別」「ゼミ」の各講座（概要は <http://www.dbj.jp/ricf> を参照）から構成される。講師は研究所が長年培ってきた学識者とのネットワークをベースに、大学の先生方を中心にお願いしている。受講対象は行内の若手・中堅クラスの行員だけでなく、協働関係にある地域金融機関等の他、講座によっては事業会社の方々にも順次開放している。実業と金融のシナジー効果を生み出すには、なによりも人材の交流が有益であり、同じ釜の飯を食べ、お互いの信頼関係を築く上で、アカデミーは絶好の「場」となりうると考えられるからである。

アカデミーの最大の目的は、実務にすぐに役立つ、表層的な金融の知識や手法を学ぶことではない。そうした知識や手法の陳腐化は早い。実務は極論すれば各々の現場でいやというほど経験できる。大切なことは、現場を離れた時間の中で、金融実務の背後にある物事の本質や考え方について、理論的・学術的な知見も借りながら理解を深めることだと思う。アカデミーでは、講師とのディスカッション、演習、グループワークも取り入れながら、それを実践している。もちろん、中長期的な視野に立ったプログラムの不断の見直しは必須であり、将来を見据えた、時代の先を行くテーマ設定の検討など、事務局の企画力・構想力が大いに問われるところだ。

金融機関の最大の財産は人材であり、金融機関は社会の公器ともいわれる。アカデミーの受講をきっかけに、社会に役立つ、また社会から感謝される金融のあり方とは何かを常に意識し、自問自答し続ける姿勢を堅持してもらいたい。受講を通じて興味や関心を持った分野は、今後も自分なりにフォローし、思考力を磨き、創造性を発揮して、新たな実務への展開に繋げて欲しい。これが事務局の切なる願いである。「マクロ経済学の入門書をテキストに、朝の勉強会を立ちあげてみた。」「取引先との会話の中で、コーポレート・ファイナンスで学習した指標を話題として取り上げたりしている。」といった地銀の方々の声も聞く。誠に嬉しい限りである。

東京大学の大瀧雅之教授によれば、恩師の宇沢弘文名誉教授が教育を論じる際、よく引き合いに出される言葉「innate(インネイト)」には、どんな人間にも生まれながらの固有の美しい多様な個性があるとの意味から、教育に携わる者は、時が満ちるまでは待つこと・静かに見守ることの重要性を説いている。これから集う受講者は、果たしてアカデミーの真意をどれほど汲み取ってくれるだろうか。焦ることなく、新たな出会いを楽しみに、7年目を迎える 2014 年度は 5 月開講となる。

2014 年 3 月 24 日